てんとう虫のおじょうさん　ウズベキスタン

昔むかし、あったとさ。
あるところに、てんとう虫のおじょうさんがいました。
ある日、てんとう虫のおじょうさんは、お婿さんが欲しくなって、お婿さんになる人をさがしにでかけました。
何カ月たったか、何日たったか、どんなに遠くまで歩いてきたのか、てんとう虫のおじょうさんにはわかりません。広い草原を歩いていると、牛飼いに会いました。牛飼いがたずねました。
「おや、てんとう虫のおじょうさん。どこへ行くの」
「お婿さんをさがしに行くの」
「お婿さんが欲しいんなら、ぼくがいいよ」
「そうね、あんたをお婿さんにしようかしら。でも、あんた怒ったら、何で私をぶつつもり」
「ほら、牛を追うこのつえで」
てんとう虫のおじょうさんは、つんとすましていいました。
「あたしは黄色いくつをはいてるわ。あたしはきれいよ。お花のような服も着ているわ。あたしはきれいよ。あんたにぶたれるくらいなら、犬のお嫁さんになったほうがましよ」
そして、どんどん歩いていきました。
どんなに遠くまで歩いてきたのか、てんとう虫のおじょうさんには、わかりません。ひと休みしていると、羊飼いに会いました。羊飼いがたずねました。
「おや、てんとう虫のおじょうさん。どこへ行くの」
「お婿さんをさがしに行くの」
「お婿さんが欲しいんなら、ぼくがいいよ」
「そうね、あんたをお婿さんにしようかしら。でも、あんた怒ったら、何で私をぶつつもり」
「ほら、羊を追うこのつえで」
「あたしは黄色いくつをはいてるわ。あたしはきれいよ。お花のような服も着ているわ。あたしはきれいよ。あんたにぶたれるくらいなら、犬のお嫁さんになったほうがましよ」
てんとう虫のおじょうさんはそういって、さっさと歩いていきました。
どんなに遠くまで歩いてきたのか、てんとう虫のおじょうさんには、わかりません。どんどん歩いていくと、ねずみのだんなに会いました。
「おや、てんとう虫のおじょうさん。どこへ行くの」
「お婿さんをさがしに行くの」
「お婿さんが欲しいんなら、ぼくがいいよ」
「そうね、あんたをお婿さんにしようかしら。でも、あんた怒ったら、何で私をぶつつも

り」

「あんたをぶつなんて、とんでもない。しっぽで、くしゅくしゅって、くすぐってあげるよ。いごこちのいい壁のくぼみに座らせて、おいしいものを食べさせてあげる」

そこで、てんとう虫のおじょうさんは、ねずみのだんなをお婿さんにしました。ねずみのだんなは、てんとう虫のおじょうさんを壁のくぼみに座らせて、ごちそうやら、パンやら水やらをせっせと運んでかわいがりました。

ある日、てんとう虫のおじょうさんは、ひとりで川に出かけていきました。そして、橋の下で、どろに足をつっこんで動けなくなってしまいました。そこへ、馬に乗った人間たちが、橋を渡ろうとやって来ました。けれども、馬がてんとう虫のおじょうさんを恐がって、どうしても橋を渡ろうとしません。

てんとう虫のおじょうさんは、馬乗りの人たちにいいました。

「ハイハイ、ドウドウの馬乗りさん。

馬を引きかえしてちょうだい。

あたしはもう死んじゃうわ。ああ。

このこと、ねずみのだんなにはいわないでね」

馬乗りたちの中に心のやさしい人がいて、このことをねずみのだんなに知らせてやりました。ねずみのだんなは、大急ぎでとんできて、てんとう虫のおじょうさんを救いだしました。

そののち、てんとう虫のおじょうさんとねずみのだんなは、ずっと橋の下に住んでいます。なんといっても、水に近くて便利ですからね。

おしまい

村上郁再話

資料『シルクロードの民話ウズベク』池田香代子訳／ぎょうせい